まちかど ネットワーク

お便りください

このコーナーは、皆さんの意見や地域の話題をお届けしています。
広報広聴課☎51－0123内線2822へお便りください。

ひと

ことしの6月、大渕に
精神障害者が共同生活する
「成徳寮（せいとく）」をつくった

渡辺好憲（よしのり）さん

（大渕）

トイレットペーパー加工の工場を経営している渡辺さんが、大富士病院に協力して「職親」を始めたのは約二十年前のこと。

職親とは、作業能力が少し欠ける人を預かり、実際に労働させることによって、その人の能力を高め、自立へ向けての足がかりとさせることを目的としています。

渡辺さんが職親を引き受けた当初は、安い労働力としての期待を、患者さんにかけていました。しかし、渡辺さんの思うようには、患者さんが働いてくれない上、周りからの誤解や偏見もあって、職親をやめようと思ったことも何度かありました。

そんな渡辺さんを励まし、後押ししてくれたのが、大富士病院の故・荻野新六院長でした。

渡辺さんは、荻野さんを通して多くの精神障害者の人たちと接する中で、病気が回復して退院しても、社会の偏見などもあり、社会復帰はなかなか難しいということを痛感していきました。

そこで、渡辺さんと荻野さんは、退院した人たちのための寮の構想を練り始めました。しかし、途中で荻野さんは亡くなってしまったため、渡辺さんが遺志を受け継ぎ、私財をなげうって「成徳寮」を完成させるに至ったのです。

成徳寮では、大富士病院から退院した十六人が、社会復帰に向けて生活を営んでいます。

「寮生は、市内六カ所の作業所に通い、働いています。みんな、おなかを減らして、作業から帰ってきますが、私と妻は、基本的に食事などの世話は、していません。寮生の自立が一番の目的なので、食事の準備や掃除などは、すべて寮生に任せています。みんな当番制で仲良く分担して頑張っていますよ」

と、話す表情からは、まるで父親のような愛情がにじみ出ていました。

今がしゅん！

見ごろ 食べごろ

「富士梨（なし）」

富士市では、明治の初めごろからナシの栽培が始まりました。水戸島や宮島でナシの試験栽培を行ったのが、「富士梨」の起源に当たります。

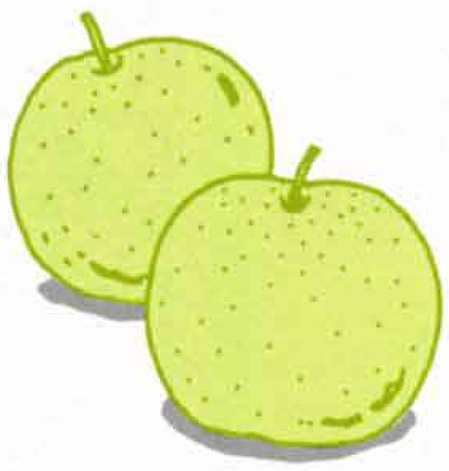
ナシの栽培を始めた当初、近所の人たちは、先駆者のことを無謀な奴だとあざ笑っていたそうです。ところが、立派なナシが実ったので、周りの農家もナシ栽培を始めることとなり、当時の加島村や田子浦村を中心に普及しました。

品種は、明治三十七年ごろに「長十郎」が登場してから、富士梨の約八〇％は、長十郎が占めるほどになりました。現在では、新水、幸水、豊水などが主流になっています。

富士梨の特徴は・・・

①果実は甘味が多く、水分が豊富で肉質がやわらかい
②皮をむいておいても、酸化することが少ない
③日持ちがよく、長距離輸送に耐えられる

などが挙げられます。

よく冷えた、甘くて水分たっぷりのナシの味覚は、夏から秋にかけての風物詩。

ことしは、富士梨に秘められた歴史を感じながら、味わってみては、いかがですか。